

タイトル：2012 Middle Eastern and Islamic Studies in Japan: The State of the Art

日時：2012年12月1日（土）14:30～19:50

場所：Japan Center for Middle Eastern Studies, 2nd Floor, A2-1, Azariyeh Bldg, Beirut Central District

The Muslim intellectual network in the eighteenth century: Focusing on academic genealogies in Shāh Walī Allāh's autobiography

石田 友梨（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

### 報告内容

本研究の目的は、18世紀インドのムスリム思想家シャー・ワリーウッラー（1762年没）の学問的系譜を明らかにすることである。ワリーウッラーは、南アジアにおけるイスラーム改革の先駆者として知られおり、現在でもワリーウッラーの思想の継承を自称する者は多い。しかし、ワリーウッラーの思想が実際にどのように継承されているかについて詳細は明らかではない。実際の継承を疑問視する先行研究のなかには、インド・パキスタン分離独立に伴い、ワリーウッラーが祖国の英雄として再評価されたことを指摘するものもある。ワリーウッラー研究のこれらの背景をふまえ、インドという局地に限定せず、イスラーム思想全体のうちにワリーウッラーを位置付けることを本研究は試みる。その第一歩として、本報告ではワリーウッラーの自伝『賢人たちの息吹き (Anfās al-‘ārifīn)』の記述から、ワリーウッラーの学問的系譜の一部を明らかにした。

具体的には、マッカおよびマディーナ（以下両聖地）にワリーウッラーが滞在していた時（1731-32年）に師事していたアブー・ターヒル（1733年没）に着目した。ワリーウッラーが自分の師について記録した『賢人たちの息吹き』には、アブー・ターヒルについての一章があり、アブー・ターヒルが誰に何を学んだかについて知ることができる。これらの記述を分析することにより、アブー・ターヒルが教えを受けた両聖地のウラマーのなかには、インド出身の人物が含まれていたことを発見できた。J. O. Voll は、アブー・ターヒルの師の時代に、両聖地で暮らすウラマーには北アフリカ出身者が見られるようになることを指摘したが、それにインド出身者も加えられることを本報告は新たに指摘した。また、両聖地におけるインド出身のウラマーの系譜は、アブドゥルハック（1642年没）まで遡ることができることも確認した。以上のことから本報告は、18世紀の両聖地とインドのウラマーは、師弟関係によってイスラーム思想を共有していたと結論付けた。このことにより、ワリーウッラーの思想が当時のイスラーム思想全体のなかで理解されるべきであるという本研究の主張に、文献的証拠を提示することができた。

### ディスカッションの概要

本報告のコメンテーターをお引き受けいただいたのは、レバノン大学のワジフ・カンソ教授であった。哲学を専門とされているとのことであったが、控え目ながらも多くの論点を提示していただくことができ、今後研究を進めていくに当って非常に有益であった。本報告は、報告者にと

ってこれまでとは異なる分野への挑戦が含まれていたこともあり、背景知識や用語の選択といった基本的事項から丁寧なコメントをいただくことができたのは幸いであった。印象に残ったことを一点だけ挙げるならば、国内のイスラーム研究では常識として通用していることも、今回のように国外の研究者の前で発表する際には通用しないということである。この点は、今後の国際会議等での発表に向けて心に留めておきたい。

### **会議参加の感想**

会議前日に機材チェックの時間をいただくなど、苦手な英語で発表を行う報告者に対する細やかな配慮が非常に有難かった。本番では教会の鐘が鳴り始めたため中断するというハプニングもあったが、無事に報告を終えることができたのは、開催者側の温かな態度が緊張を解してくださったからである。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の先生方には、三年前の「中東・イスラーム教育セミナー」でお世話になって以来の再会であり、少しでも研究の進捗をお見せできればという一心で頑張れた。

18 世紀インドの思想家を研究対象としている報告者にも、レバノンを訪問する機会を与えていただけたことには感謝の言葉もない。異なる分野を研究している他の報告者たちからの刺激もあり、専門以外にも広く目を向けることの大切さを痛感した。現代政治に無関心であった会議参加前は、なぜ現在レバノンが危険なのかよく理解しておらず、我儘を言って黒木先生や千葉さんにご迷惑をおかけしてしまったことを、この場をお借りしてお詫びいたします。最後になりましたが、このような貴重な機会を与えてくださった関係者の皆さまに、改めて心より御礼申し上げます。